

ラテンアメリカ特集

2017年注目の旅行素材

多彩な表情を見せるラテンアメリカ。各国それぞれユニークな旅行素材が今、日本マーケットでも注目を集めている。ノンストップ便の運航がスタートし、より行きやすくなったメキシコ、オリンピックとパラリンピックで関心が高まったブラジル、人気の高いアルゼンチンやペルー、チリやエクアドル、近年人気沸騰のボリビアなど、実にバラエティー豊かだ。ラテンアメリカには、日本マーケットではまだまだ紹介しきれない「原石」がたくさん眠っている。ここでは、2017年、新たにチェックしたいラテンアメリカの旅行素材を紹介したい。

ペルー

ベルモンド アンデアン・エクスプローラー

ベニス・シンプロン・オリエント・エクスプレスを運営するベルモンドが、2017年5月より、南米初の豪華寝台列車「ベルモンド アンデアン・エクスプローラー」の運行を開始。著名デザイナーによる内装は、アルパカやアンデスの自然がモチーフ。計34室のキャビンと2両の食堂車、ラウンジ車、展望車で構成。2泊3日で標高2000~4000メートルの高地を回るコース「ペルビアン・ハイランド」は、ペルーアンデスの旅のハイライトとも言える。



ウェブサイト：
<http://www.belmond.com/belmond-andean-explorer>

アルゼンチン

北部ラ・プーナの塩湖とウマワカ渓谷

ラ・プーナは、隣国チリやボリビアへ続く標高3500~4000mの高原地帯。富士山よりも高いところを走る「雲の列車」や塩湖など、見どころがいっぱい。また、ウマワカ渓谷は、1日の時間帯に応じて岩肌の色彩が変化する様子が印象的。インカ帝国の砦や遺跡、岩絵が残り、世界文化遺産にも指定されている。アルゼンチン北部エリアの拠点となるサルタへは、ペルーのリマから直行便が就航、周遊しやすくなった。



ラ・プーナの塩湖(サリナス・グランデス) © INPROTUR



ウマワカ渓谷 © INPROTUR

メキシコ

直行便でアクセス、メキシコシティ

5つもの世界遺産を有する巨大な首都メキシコシティ。古代都市遺跡テオティワカンにそびえる世界最大級のピラミッドや、16世紀以降に受けた西欧の影響を感じさせる街並みが美しい歴史地区(ソカロ)、そしてメキシコが誇る建築家ルイス・バラガンの建築など、メキシコが紡いできた歴史を古代から現在まで堪能できる見所がたくさん。また、メキシコ料理もユネスコ無形文化遺産。直行便で成田から約12時間、いま最もイチオシのデスティネーションのひとつだ。



アメリカ大陸最大の都市メキシコシティ © Mexico Tourism Board: Photo/Ricardo Espinosa-reo



世界遺産のルイス・バラガン邸とスタジオ © Sebastian Saldívar / courtesy of Editorial of RM Mexico (バラガン財団は、ルイス・バラガンの業績に対する全権利を所有しています。www.barragan-foundation.org)

ブラジル

中西部ポニートでアドベンチャー体験

ボートで透明度の高い川と湖をめぐる、シュノーケリングをしながら川を下るフローティングで淡水魚を間近にしたり、ユニークなアドベンチャー体験が楽しめる。また鍾乳洞の奥に広がる地底湖は、



フローティングで川を下る © EMBRATUR

その神秘的な青さから「青い湖」と呼ばれ、湖を囲む石灰石の白壁とのコントラストが美しい。ここでは観光と自然環境の両立を目指し、環境保全を促進する観光システムを採用しているのが特徴だ。



神秘的な「青い湖」 © EMBRATUR

パラグアイ

パンタナール&チャコ地方の大自然

パラグアイ川沿いの広大な湿原地域パンタナールと、低木の森と乾燥地が広がるチャコ地方は、どちらも手つかずの大自然を体験できるエリア。ワニやカピバラ、アナコンダ、グアナコ、ホエザル、ジャガー、プーマなど、まさに「野生動物の宝庫」で、南北からたくさんの渡り鳥が集まるバードウォッチングのメッカとしても有名。コンセプトやバイアネグラを拠点に、数日間のクルーズで大自然を満喫できる。



クルーズで大自然を満喫 © SENATUR



ラテンアメリカ屈指の大湿原パンタナール © SENATUR

ウルグアイ

ブエノスアイレスから船で首都モンテビデオへ

「世界一貧しい大統領」で話題を集めたウルグアイの首都モンテビデオへは、アルゼンチンのブエノスアイレスからフェリーで行くのがおすすめ。広大なラプラタ川を横切り、所要時間は2時間半ほど。数多くのクルーズ船が集まり、旧市街は歩いて散策しやすく、22キロにも及ぶビーチ、第1回目のサッカーワールドカップのメイン会場セン



独立広場 © MINTUR



世界一長い期間行われるカーニバル © MINTUR

テナリオ・スタジアム、40日間も続く毎年2~3月のカーニバルも見どころのひとつだ。

ペルー観光の新たな可能性 北部アマゾナス州に魅力の観光スポット

南米でもトップクラスの人気を誇るペルー。これまではマチュピチュやクスコ、ナスカといった南部が人気を牽引してきた。しかしペルー北部にも南部に負けない魅力たっぷりの観光素材が数多く存在している。



●PROMPERUペルー政府観光庁
jp.peru.travel
●フェイスブック・アカウント
https://www.facebook.com/visitperu.jp/

人気の定番観光地が集まる南部と 注目の新 destinations が豊富な北部



マチュピチュ遺跡

ペルー共和国は日本の3.4倍に相当する広大な国土を持ち、自然環境も熱帯雨林地域(セルバ)、アンデス山岳地域(シエラ)、海岸砂漠地域(コスタ)と変化に富む。多様な地形と気候はさまざまな文化や文明を育み、後に魅力的な観光素材となるような多彩な歴史遺跡や建造物を残してきた。国内にマチュピチュ遺跡やナスカの地上絵など12件ものユネスコ世界遺産が点在するのはこのためだ。

また近代以降の移民の影響も含めた多彩な文化のフュージョンによって生まれたペルー料理は、世界的な注目度も上昇中。「世界のベストレストラン50」(2016年)にペルーのレストランが3店もランクインしている。

日本との友好関係は長く親密だ。ペルーは明治維新のわずか5年後、ラテンアメリカ諸国で最初に日本と国交を結んだ。さらに南米で最初に日本人移住を受け入れた国であり、現在は約10万人の日系人がペルーで暮らしている。

ペルーは日本からの南米観光の中心で

もあり、パッケージツアーや手配旅行を含む南米旅行の多くはペルーのモノデスティネーション、あるいはペルーとその他の南米各国の組み合わせが一般的で、ペルーのモノデスティネーション商品は大手旅行会社の南米ツアーの47%を占めている。日本から、ペルー旅行のゲートウェイとなる首都、リマへのアクセスも米国、カナダ、ヨーロッパやメキシコ経由による多数の選択肢がある。

ペルー政府観光庁によれば、15年にペルーを訪れた日本人旅行者は5万5311人。日本人旅行者はペルーで1人平均1519ドルを消費し、平均滞在期間は8泊。旅行者の82%が旅行会社を使っている点も特徴だ。さらに、9月に来日した観光庁のサンドラ・ドイグ・アルベルディ副長官によれば、同国は今後5年間で外国人訪問者数を現状の2倍に相当する700万人まで拡大する目標を立てている。このためマチュピチュをはじめとする定番観光地のプロモーションだけでなく、定番観光地以外のアピールも強化していく方針だ。

日本市場でも、絶大な人気を誇るマチュピチュや、旧市街が世界遺産に登録されているリマ、インカ帝国の首都として栄え見どころも豊富なクスコ、地上絵で知られるナスカとその近郊のビーチリゾートであるパラカ



クスコの職人



天空の湖「ティティカカ湖」



チャンチャン遺跡



アレキパ富士と呼ばれる「ミスティ山」

スといった定番観光地以外への注目度も徐々に高まりつつある。

たとえば世界遺産にも登録されているアレキパは、植民地時代に白い火山岩を使って建てられた多くの建物が残る美しい「白い街」やアレキパ富士と呼ばれる「ミスティ山」で知られる。アレキパはリマからの直行便(所要1時間)も運航されており、ミスティ山を眺めながら市内観光を楽しんだり、陸路ドライブで、世界一深いといわれるコルカ渓谷で、野生のコンドル観察をしたり、周辺の絶景を楽しむのにも都合がよい。また標高3800mにあるインカの神話が息づく「天空の湖」ティティカカ湖と、湖畔の町であるプーノはインカ帝国の末裔たちの民族文化を体感できる場所として注目されている。

これらペルー南部の観光素材に加え、北部にも有力観光素材が数多い。北部の太平洋岸に位置するランバイエケ県チクラヨはモチエやシカンといったプレインカ時代の遺産をシパン王墓博物館やトゥクメ遺跡で見学できる。さらに、自然を楽しみたい場合は、同じ県内にあるチャパリ自然保護区で自然と希少な動物を観察することができる。

チクラヨの南のラ・リベルタ県に位置する北部最大の街、トルヒーヨは、インカ

帝国によって滅ぼされるまで繁栄したチムー王国の栄華を今に伝える世界遺産、チャンチャン遺跡をはじめ月のワカ、太陽のワカ、エル・ブルホ遺跡といった5000年前のインカ時代の巨大ピラミッド型神殿が存在する有名観光地だ。

さらに、同じ北部のアマゾナス県では、熱帯雨林の中で育まれる蘭の花々をはじめとする熱帯植物、さらにメガネグマやペルーの国鳥であるアンデスイワドリなど希少動物に出会うこともできる。

県庁所在地のチャチャポヤスは、大きな広場と狭い路地、そしてコロニアル調の建物が特徴の町。マチュピチュ遺跡にも劣らないといわれるクエラップ遺跡の玄関口だ。

ペルー最高峰のワスカラン山(標高6768m)の山麓にある街、ワラスは世界遺産のワスカラン国立公園のゲートウェイとして、トレッキングや登山愛好家の間で知られている。

さらに、アマゾン熱帯雨林地域で最大の都市であるイキトスは、アマゾン川を巡る高級クルーズ船の発着地となっている。



注目されるクルーズ

クエラップ遺跡は北部の最注目素材 ～プレインカ時代の天空の街～

同じペルー北部でも、アマゾン川の流域があるアマゾナス県は、最も観光需要開拓の余地が大きい destinations の一つだ。

現在、最も注目されるのが、クエラップ(Kuelap)遺跡。インカ時代の「天空の街」がマチュピチュなら、プレインカ時代を代表する「天空の城」がクエラップだ。標高3000mのバレッタ・ヒルの頂上付近にあるクエラップ遺跡は、かつてここが大規模な城塞都市だったことを今に伝える。



クエラップは、インカ帝国に統合されてしまう前、このあたりに花開いたチャチャポヤス文化の中心都市だったとされる。遺跡を取り囲むように築かれていたと思われる城壁の一部が残っており、高さ20mにも達する城壁はチャチャポヤス文化の高い建築技術を示しており、プレ



インカ時代の代表的な建造物の一つとされている。

クエラップ遺跡には3つの主要な入口があり、そのうちの1つは城壁の間の隙間を通る、狭い小道を通らねばならない。これは守りを固める狙いがあったと考えられ、軍事目的の要塞機能も持っていたとの仮説を唱える専門家もいる。



クエラップ遺跡の中には、壁にひし形(ダイヤモンド形)の模様を施した円形の建物が420軒もあり、最盛期には4000人が居住していたと推計される。



クエラップ遺跡の周辺には、同じチャチャポヤス文化の遺跡として、当時の墓だったとされるレバッシュの霊廟やブエプロ・デ・ロス・ムエルトスがあり、レイメバン博物館は近くで発掘された多数のミイラを収蔵している。

クエラップ遺跡は、チャチャポヤス文



貴重な鳥「オナガラケットハチドリ」

化を伝える歴史遺跡として貴重なだけでなく、周辺の自然環境も魅力十分で、ペルー北部の貴重な動植物を観察できる。代表的なのが美しいオナガラケットハチドリ。ペルー北部、アンデス山地の奥深くに数百羽しか生息しないとされる珍しいハチドリだが、クエラップ遺跡周辺では朝の訪れとともに、この貴重な鳥を観察するチャンスがやって来る。

オナガラケットハチドリは、その名の通りラケットのような形をした長い羽を持つのが特徴で、NHKの自然紹介番組「ダーウィンが来た」でも「奇跡のハチドリ」として紹介されたことがある。このほか世界有数の段差を誇るゴクタの滝といった見どころもある。

プレインカ時代を代表するクエラップ遺跡があり、世界的な珍鳥であるオナガラケットハチドリを観察できる場所でありながら、これまで観光地として大きな話題となったことがないのは、アクセスが簡単ではないからだった。

以前はリマからバスで20時間以上かけて移動するしかなかったが、今年の9月30日からはアクセスが激的に改善した。リマからハエン(Jaen)という町までのラタム航空の直行便が、毎日運航されるようになったからだ。リマからハエンまで

の所要時間は約1時間30分で、ハエンからクエラップ遺跡までは車で約4時間の道のりだ。リマからの所要時間は4分の1程度に短縮されたわけだ。



さらにクエラップ遺跡までのケーブルカーもまもなく開業の運びだ。バレッタ・ヒルの山道を登る替わりに、山のふもとから頂上まで全長4kmを20分で結ぶケーブルカーに乗り、アンデス奥地の景観を楽しみながら遺跡まで到達できるようになる。ケーブルカーは観光庁が15年から建設しており、16年末に開業を予定している。

クエラップ遺跡の観光拠点となるのが、遺跡の40kmほど北に位置するチャチャポヤス(Chachapoyas)。アマゾナス州の州都で、ホテルやレストランが営業している。

ラタム航空

「自然」と「世界遺産」に注目集まる ラタム航空が業界意識調査を発表

ラタム航空グループ(ラタム航空)は、旅行会社とツアーオペレーターを対象に行った南米旅行の今後のトレンドについての意識調査結果を発表した。同調査は、「第2回ラタム南米スペシャリストセミナー」の参加者を対象に実施。のべ71名の業界エキスパートから回答を得た。回答から読み取れる南米旅行のトレンド。特に南米でしか体験できない素材として、独特の自然や世界遺産に多くの回答が集まった。【画像提供:ラタム航空】



「第二のウユニ」を求め声 セミナーでは世界遺産を紹介

ラタム航空が開催する「ラタム南米スペシャリストセミナー」は、旅行会社とオペレーターを対象に、昨年より年1回のペースでスタート。南米各地における旅行関連の最新情報を提供することが目的で、昨年の第1回では、ブラジル、チリ、ペルーを紹介。第2回目となる今年度は、アルゼンチン、コロンビア、エクアドルの3カ国に焦点を当てたプレゼンテーションを行った。

調査結果を見ると、日本人旅行者が現在南米で注目している旅行素材で最も回答が多かったのが「自然」(52%)だった(表1参照)。パタゴニアの滝や氷河、ガラパゴス諸島の在来生物など、南米で



アルゼンチンの世界遺産「コルドバのイエズス会伝道所とエスタンシア群」

か体験できない自然は数多く、近年爆発的な人気を呼んでいるボリビアのウユニ塩湖もその一例。業界内では、自然の美しさ、雄大さを満喫できる「第二のウユニ」となる観光地を求める動きが強まっている。

また「世界遺産」(28%)への注目も高い。マチュピチュ、イグアスの滝、イースター島は日本人観光客にも世界遺産として既に有名だが、南米にはまだまだ数多くの世界遺産が存在する。セミナーでは、まだまだ日本市場で知られていない世界遺産として、アルゼンチンの「コルドバのイエズス会伝道所とエスタンシア群」や、コロンビアの「カルタヘナの港、要塞と建造物群」などを紹介、セミナー参加者の注目を集めた。

富裕層向け情報の必要性 個人旅行は4割超

また、南米の旅行商品を造成する際に必要な情報として、こちらでも回答が多かったのが「自然」(22%)と「世界遺産」(19%)。次いで「富裕層向け」(17%)の

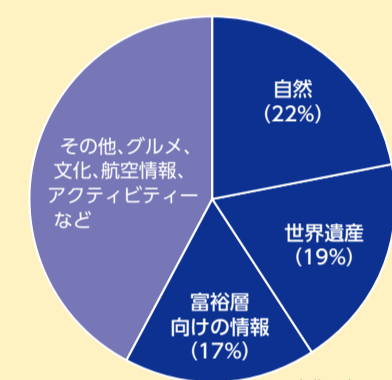


ここだけの自然が魅力のガラパゴス諸島(エクアドル)



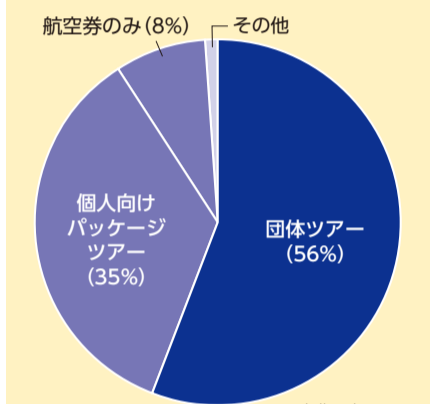
セミナーで関心が集まったコロンビアの首都ボゴタ近くのシバキラの塩の大聖堂

【表2】旅行商品造成・販売にあたり一番欲しい情報



出典=表1に同じ

【表3】南米行きで最も多い旅行形態

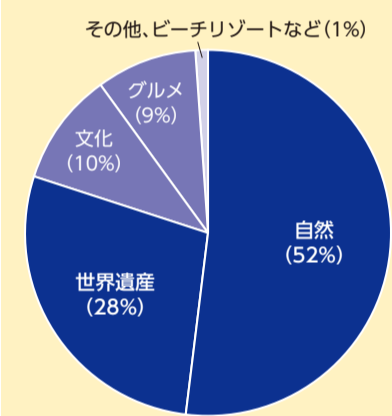


出典=表1に同じ

回答が集まった(表2参照)。南米は旅行会社にとって高収益が期待できるデステイネーションであり、今後はエクアドルのガラパゴス諸島周辺のクルージングやコロンビアのコーヒー産地の文化的景観への探訪など、南米での富裕層向けツアーのニーズが高まると見ていいだろう。一方、旅行スタイルについての回答で

は、「団体ツアー」(56%)が最も多かったものの、「個人向けパッケージツアー」(35%)、「航空券のみ」(8%)といった回答もあり、2つを合わせた個人旅行は43%に達する結果となった(表3参照)。多彩な商品をラインナップすることで、こうした個人需要を獲得できるチャンスがあると言えよう。

【表1】日本人旅行者が南米について一番興味を持つと思われるもの



出典=ラタム航空グループ意識調査(2016年10月、回答数71)

JTBワールドパッケージズ

ニーズに応えた商品造成 快適な旅の提供に工夫

JTBワールドパッケージズの「ルックJTB」では、顧客のニーズに応えた商品造成を進めるべく、快適な旅に工夫を凝らしている。

例えば、ペルー1カ国の周遊8日間コース「感動のペルー紀行8日間」では、価格重視型のコースだが、マチュピチュを丸1日観光できる旅程を組み、満足度を高めている。値付けは、前年度よりも

下回る44万9000円からと、割安感を打ち出し、好評とのこと。また、基本コースとハネムーン向けのコースとジョイントとなっており、効率的な集客を実現している。

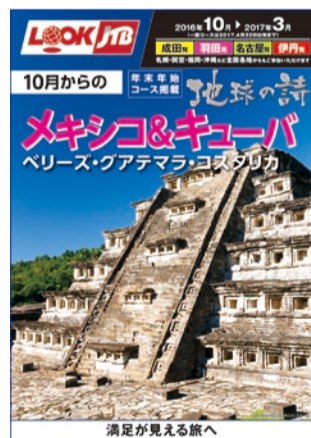
ペルー周遊ものでは、ほかに成田-ロサンゼルス間が日本航空利用の「魅力満喫ペルー紀行8日間」もある。

また、南米周遊の主力商品「南米大陸三大絶景めぐり10日間」では、これまで2日目に高地となるペルーのクスコへ移動していたが、4日目に変更することで、ペルー到着後すぐに高地へ移動することなく、高山病の発生リスク軽減を図った。

また、ロサンゼルスで確実に乗継便に乗り継げるよう、十分な乗り継ぎ時間を取って、ロサンゼルス市内観光を付けたことで、お得感をもたせつつ、乗り継ぎリスク回避となる工夫を行っている。

このほか、南米の商品では、オリンピックとパラリンピックで注目を集めたブラジルのリオデジャネイロのカーニバル観戦ツアーや、ビジネスクラス利用の周遊コース、世界遺産イグアスの滝を空から眺めるコース、人気沸騰のボリビアのウユニ塩湖で3連泊するコースなど、多彩なラインナップを用意。

また、チリ北部のアタカマ高地からウ



2016年度下期中米パンフレット

ユニ塩湖へ移動する周遊コースや、アルゼンチンのブエノスアイレスに4連泊して、市内や近郊を楽しむ8日間のコース、コロンビアやエクアドルの周遊など、ユニークなコースも設定している。

一方、中米は、メキシコとキューバを軸に世界遺産に焦点を当てて商品を造成。古代遺跡、カンクンやリビエラマヤを始めとするリゾート地、コロニアルシティ、食の魅力なども積極的に紹介。メキシコシティのスケルトンタイプの商品、ベリーズ、グアテマラ、コスタリカ

のエコツアーなど、こちらも幅広いラインナップとした。

2017年度については、南米と中米に分けていたパンフレット展開を合冊、中南米として展開することで相乗効果を狙う。パンフレット冒頭では、各観光地の詳細な説明と、同社商品のオリジナルポイントを訴求。服装や注意点なども掲載し、より分かりやすい内容となっている。



2016年度下期南米パンフレット



2017年度上期中南米パンフレット

へいおまち!



収益重視に
しますか?

乱売に
しますか?

うちの板さんは収益重視です!

3月2日から 毎日運航へ

便利なターミナル2から、メキシコ国内46都市へお乗り継ぎいただけます。



メキシコのグローバルな航空会社



AEROMEXICO



成田発メキシコシティ行き AM057便/毎日 成田発 15:25 → メキシコシティ着 13:05
 メキシコシティ発成田行き AM058便/毎日 メキシコシティ発 0:30 → 成田着 06:20(翌日)

*上記のスケジュールは3月2日時点の現地時間で表示され、3月25日までの冬期スケジュールで、政府認可申請中です。予告なしに変更する場合がございます。